

第26回

第3章 現代を生きる人間の倫理

人間と社会のゆくえ

今回学ぶこと

近代の特徴だった「理性中心主義」「人間中心主義」という考え方がゆらぎ、価値観が多様化する現代の世界において、人間と社会をどのように考えればよいのか、20世紀後半の代表的な思想を参考にしながら思索を深める。特に、ドゥルーズの欲望や管理社会についての考え方、デリダの脱構築という考え方、「他者」とのかかわりについてのレヴィナスの考え方を学習して、これからの人間と社会のゆくえについて考える。



講師

小林和久

■ ■ ドゥルーズと欲望 ■ ■

現代フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは、精神分析学者のフェリックス・ガタリと共同で、1972年に『アンチ・オイディプス』という本を発表する。ドゥルーズとガタリは、この本で、「欲望する機械」という表現を使い、無数にある人間の欲望は、それぞれが他の欲望と結びついたり、それを断ち切り別のものに向かったりして、さまざまな方向に流れていく、と説く。この欲望の流れは、それを規制するような秩序があれば破壊しようとするので、「欲望は本質的に革命的である」とされる。しかし、人類の文明や国家は、革命的な欲望を規制・抑圧するものであるため、人間は自分の欲望を抑制することも欲望するという矛盾も生じる。そしてドゥルーズは、現代の社会を、同じフランスのフォーコーが説いた「規律型の社会」としてではなく、「管理社会」として捉え、現代人は、自分の行動を常に記録保存され、その情報が蓄積されていくシステムから逃れることができない、と説いた。

■ ■ デリダと脱構築 ■ ■

現代フランスの哲学者デリダは、フランス領のアルジェリアに生まれ、ドイツの哲学者ハイデggerなどの影響を受けながら、伝統的な哲学思想を批判する独特な考え方を提唱する。デリダは、これまでの西洋哲学は、心と体、善と悪、真と偽など、二つのものを対立させて考えるという、二項対立の考え方が中心だったと説く。そして、この二項対立などの、こり固まった見方や考え方を解きほぐし、意味を解釈し直すことを「脱

構築」と呼び、伝統や秩序を解体して隠されていた可能性を明らかにすることの重要性を説いた。この脱構築という考え方は、哲学思想だけにとどまらず、文学や芸術、建築などの幅広い分野にも応用されていく。しかし、他者との関係としての正義については、脱構築ができず、その正義にもとづいて法律や規則を脱構築できると考えた。

■ ■ 「他者」 とのかかわり ■ ■

「他者」という存在について、さまざまな捉え方・考え方があるが、実存主義のサルトルは、人間は自分の生き方・あり方を常に他人から判断され、他人のまなざしから逃れられない、として、「地獄とは、他人のことである」と言う。しかし、リトアニア生まれのユダヤ系の哲学者レヴィナスは、他者の存在によって、人間は真の自己として倫理的な生き方ができるようになると説く。レヴィナスは、他者という存在を「顔」という言葉で説明し、自分だけの閉じこもった世界ではない、自分を無限に超えた世界に開く存在として、他者の意義を考える。他者の顔が自分の目の前に迫ったとき、「殺すな」という倫理的な命令が呼びかけられ、自分とは根本的に異なる他者を受け入れて、他者の痛みにも責任をもつとき、自分という存在は無限へと開かれ、真に倫理的な主体となる、と言う。

◆ コラム ◆

ドゥルーズとガタリが共同で書いた『アンチ・オイティプス』という本は、発売されると同時にフランスの若者たちに熱狂的な人気をあっつめたそうです。しかし実際読んでみると、目新しい言葉がたくさん使われ、何を言いたいのかよくわからない、非常に難解な本でした。それなのに、なぜ多くの若者に支持されたのでしょうか。

その答の一つに、当時の時代・社会背景があります。1968年5月、フランスでは学生が中心となって自由や民主化を求める大規模な運動が起こります。デモだけでなく、街中にバリケードをつくったり、警官隊と衝突して投石したり車を燃やしたり、死傷者も出ました。その始まりは、大学の中で男女の学生寮を自由に行き来できるようにしたい、という学生たちの要求だったそうです。そんなことから、社会の中のさまざまな束縛への異議申立てや自由を求める要求が一気に噴き出して、国を揺るがす大きな運動へと発展していきます。この運動は、「五月革命」や「五月危機」と呼ばれたりもしますが、学生たちの自由な生き方や欲望の解放という考え方につき動かされた運動とも言えます。

実存主義のサルトルはこの運動を熱烈に支持しますが、ドゥルーズ・ガタリの『アンチ・オイティプス』も、その難解さにもかかわらず、読み進めると「欲望を全面的に肯定する」というメッセージを与えてくれていると理解できます。当時の若者たちは、自分たちの生き方・あり方のよりどころを探して、この難解な本に挑戦していたとも言えるでしょう。